



心に刻まれた 慟哭

東日本大震災取材日記①

ノンフィクションライター 山川 徹

あの日、故郷を離れて暮らす多くの東北出身者が、胸の張り裂ける思いで地震直後の中継映像を見ていた。仙台で学生時代を送り、東北各地を取材で歩いてきた山川さんは震災の2日後、東京から東北へ向かった。

届いた一本の電話

三月二日(土)

被災二日目。東日本を大きな揺れと津波が襲ってから一日が過ぎた。東京に暮らすばかりはテレビが流す被災地の映像をずっと見続けていた。リアリティのない、まるで映画のような映像を――。

けれども、テレビに映し出される町は、大学時代を仙台で過ごし、東北各地を取材してきたぼくが、確かに歩いてきた町だった。

仙台、岩沼、名取、松島、多賀城、塩竈、石巻、南三陸、気仙沼、陸前高田、大槌、釜石、八戸……。変わり果てた町の風貌が映し出されるたび、揺れと津波のエネルギーに息をのみ、おののいていた。それまでぼくが取材してきた新潟中越地震など

【写真】 行方不明者の捜索に携わる警察官（3月21日、南三陸町）

の災害とは、破壊力も規模も、そして被災した人々の数も桁違いだ。被災地で暮らす知人や友人と連絡がとれない。すぐにでも東北に駆けつけたいという衝動とともに恐怖も襲ってきた。躊躇した。

状況を把握してからのほうが……。そんな言いわけが、踏み出す一歩を先送りにさせた。

吹っ切れたのは、その夜。きつかけは被災地から届いた一本の電話だった。

「経験したことがないほど激しい揺れだった。本当に死ぬかと思ったよ」

仙台市の出版社「荒蝦夷」の代表

●やまかわ・とおる 一九七七年山形県生まれ。東北学院大学法学部、國學院大学文学部卒業。各紙誌にルポルターージュを寄稿。著書に『離れて思う故郷』（荒蝦夷）、『捕るか護るか？ クジラの問題』（技術評論社）がある。

取締役である土方正志さん（四八歳）はそう切り出した。阪神淡路大震災をはじめとして奥尻島や雲仙・普賢岳などの被災現場を取材してきた土方さんの言葉に、やはりとんでもない災害が起きたんだと改めて思った。十数年前までフリーランスのライターや編集者として活躍していた土方さんは、民俗学者の赤坂憲雄さんが提唱、主導する「東北学」に賛同して、東京から仙台に移り、「荒蝦夷」を立ち上げた。

四人のスタッフは全員無事だったものの、土方さんの自宅マンションは半壊してしまい立ち入りできないという。編集部が入るビルも僅かだが傾き、余震に耐えられるか不安だと話した。スタッフや夫人らとともに自動車のなかや近所の寺院で寝泊まりしていた。そのなかにはテレビが「壊滅」と伝える気仙沼に暮らす

家族と連絡が途絶えた者もいた。

「いまはとにかく食い物が無い」と土方さんは語った。

山形県出身のぼくが、土方さんら各地を歩きはじめてもう十年になる。ぼくは、東北の港町に吹く潮風の香りを嗅ぎ、海に生きる人たちの声を確かに聞いてきたのだ。

早く東北に戻らなければ――。そう思った。

三月三日(日)

被災三日目。早朝から被災地に向かう準備に取りかかった。買い出しに出るとパチンコ店が軍艦マーチを流していた。多くの人がパチンコ玉を弾く耳障りな騒音が響く。

三〇〇キロ北の土地では、いままさに多くの人が命を奪われているにもかかわらずだ。目眩がするような